ポケモン不思議のダンジョン 緑の探検隊

光輝宙(ピカチュウ)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケモン不思議のダンジョン　緑の探検隊

【Ｎコード】
Ｎ６６３５Ｘ

【作者名】
光輝宙（ピカチュウ）

【あらすじ】
この話は記入されてるとおり、ほぼオリジナルです。
丸コピではありません。
この時代はポケモンしかいない時代。
この時代で物語ができる・・・

ミケ（ピカチュウ）が、海岸でヒカル（ヒトカゲ）が倒れてるのを見かけた。

しかし、ヒカル（ヒトカゲ）は記憶がなかった。

どこからきたかも。

なんでいるのかも。

しかし、自分の名前は覚えてる。

ここからいろいろな出来事に巻き込まれる。

お知らせ【少し更新出来ない状況に追い込まれてますので、次回更新はいつか分かりにくいです】

～第1話～　出会い（前書き）

さて、この小説を作ろうと考えてから5時間ですでわ第1話スタート

～第1話～　出会い

ある日・・・

トレーシャータウンの海岸にヒトカゲが倒れている。

どうやら嵐にまきこまれここに倒れてたようだ。

こんな事は誰も知らず・・・

そこへ、ピカチュウが来た。

そこでピカチュウは倒れているヒトカゲを目撃した。

ピカチュウは早速と駆けつけた。

ピカチュウ「ねえ、君！大丈夫！？しっかりして！？」

とても心配しているようだ。

ヒトカゲは目を覚ました。

ヒトカゲ「・・・ここは？」

ヒトカゲは不思議そうに言った。

ヒトカゲ　（なんでここに・・・？思い出せない・・・）

そう、ヒトカゲは記憶を失ったのだ。

ピカチュウ「君はどこから来たの？ここらでは見かけないけど・・・」

ピカチュウは言った。

ヒトカゲは自分が人間と言うことと、名前は思い出せた。

この事を詳しく話した。

ピカチュウは驚いた。

ピカチュウ「しかし、なんでこうなったのかわからないのか・・・」

と、そこへ・・・

つづく

～第1話～　出会い（後書き）

はいひとこと

えーと、えー、その・・・だから・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

とりあえず明日は更新がしっかりできます。

～第2話～　ドガースとズバット、あらわる！（前書き）

しーーーーっかり書きましたぉ

しかし、１６時から２１時まで完成にかかったとさ（爆）

今回に新たに出て来るポケモンは、

本日友達に

好きなポケモンは？

で意見の多かったポケモンを出します。

あるポケモンはとてもおおいですが、

名前をふせています

それは、ばれると今度の展開がぐちゃぐちゃになりますからねぇw

とりあえずスタート！

おまけがあるよ　それは下に。

～第２話～　ドガースとズバット、あらわる！

～前回～
ある嵐の日の次の日、海岸にヒトカゲが倒れていた。

そこへピカチュウが来てヒトカゲは起きたが、

なんとヒトカゲが記憶を失っていた。

そこへ空から・・・

☆ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー☆

空から何か飛行生物（？）が真上を素通りした。

そのすきに誰かに体当たりをされた。

『いたっ！』

体当たりをしたのはドガースとズバットだ。

どうやら、あの物をねらってるらしい。

それは、珍しい模様の入った岩だ。

ドガース達はこれをお宝だと思い狙っているのだ。

その時にドガース達が狙っている岩をピカチュウは落としてしまった。

その石をなんとドガース達が奪ってしまった。

ドガース「どうした？奪い返しに来ないのかい？」

ドガースからかうように言った。

ピカチュウ「うぅ・・・」

ドガース「じゃあな、弱虫君。」

ズバット「いい気味だぜ。ケケケ。」

と、言って洞窟に入って言った。

ピカチュウ「・・・どうしよう・・・あれは僕の宝物なんだ・・・」

ピカチュウは少し涙目になりながら言った。

ピカチュウ「お願い。一緒に取り返してよ。僕一人では行けないよ・・・」

ピカチュウは言った。

もちろん、ヒトカゲはいいよって返事をした。

ピカチュウ「本当に！？ありがとう！！さあ、早く行こう！」

そして『海岸の洞窟（かいがんのどうくつ）』へ向かうのであった・・・

～第2話～　ドガースとズバット、あらわる！（後書き）

もー正直言いたいけど、

ほぼ原作じゃない？

でも探検隊を結成させよーさせよーとさせたら

こうしないといけないからしかたない・・・

～おまけ～

アンケートを取りました！

『ピカチュウ』と『ヒトカゲ』どっちが好き？

２５人に聞きました。

結果はこうなりました

ピカチュウ　１０人

ヒトカゲ　　１５人

えーと、意外ですねー

（ピカチュウと思ったのにぃｗ）

でわまた次回～

呟き　ノートにポケモン関係メモしてるけどめんどくさいっ！

～第3話～　チーム結成（前書き）

え！？1日に二回目の更新！？

って思いの皆さん、光輝宙です

調子が良すぎてw

～第3話～　チーム結成

あらすじ

ドガースとズバットに大事な岩を奪われた・・・

ピカチュウ達は逃げた先の

海岸の洞窟（かいがんのどうくつ）へ・・・

☆ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー☆

そして、二人は海岸の洞窟へ・・・

ピカチュウ「多分ドガース達はこの奥にいるはずだ・・・さあ、早く行こう！ヒトカゲ！」

と言うと、洞窟に入った。

が、入って早速ポケモンがあらわれた。

どうやらシェルダーのようだ。ピカチュウには有利だ。

しかし、体当たりと、尻尾をふるしか覚えてなかった。

ピカチュウ「よーし、体当たりだ！」

とりあえず、抵抗しようとするが、かわされてしまう。

シェルダーも体当たりを繰り出して来た。

攻撃はみごとにピカチュウにヒットした。

ピカチュウ「うわっ！」

ピカチュウは飛ばされてしまった。

それをヒトカゲ見ていた。

ヒトカゲもひっかくで抵抗しようと思った。

上手く当たった。そして、シェルダーは倒れた。

ピカチュウ「やるね！一発で倒すだなんて！」

ピカチュウは言った。

ヒトカゲ「適当にわざを出してみたら当たったよ」

と言いつつ奥地へついた。

そこには、ドガースとズバットがいた。

奪った岩を持っている。

ドガース「おやおや。これはよわむし君。こんな所まで来たのかい。」

ピカチュウ「そ・・・その岩を返してよ！それは僕の大切な宝物なんだ！」

ピカチュウは言った。

ドガース「ほう。そんない大事な物なのか。」

ズバット「そんなに大事な物だとよけいに返せなくなったなぁ。」

ピカチュウ「そんな・・・」

ズバット「そんなに返してほしければ力ずくでかかってくるんだな。」

ピカチュウ・ヒトカゲ「なんだと!?」

いつの間にかにバトルは始まっていた。

ズバットはエアカッターをくりだしてきた。

ズバット「くらえっ!」

みごとによけられた。

この攻撃によりピカチュウは強気になった。

ピカチュウ「ど・・・どっからでもかかってこい!」

ちょっとピカチュウは震えていたが、強気だ。

ドガース「ほう、そんなにビビってちゃ俺たちに勝てないぜ、弱虫君。」

ピカチュウ「ぐぬぬぬぬ・・・もう許せないっ！」

ピカチュウは怒っている。

ヒトカゲ「よし、早くやっつけねて宝物を取り替えそうよ！」

二人はひっかくや、体当たりの繰り返しでやっとやっつけた。

ピカチュウ「やった！やっつけた！」

ドガーズ「なんでこの俺が負けるんだ・・・」

ズバット「ケッ！この岩は返すよ！」

ドガーズ「今回勝っただけでいい気になるなよ！」

ズバット「おぼえてろ！」

そう言うと退散した。

ピカチュウ「ああ、よかった・・・これがないと・・・」

ピカチュウは涙目になっている。

ピカチュウ「とにかく外に出ようよ。」

場所は代わりここは海岸。

ピカチュウ「とりかえしてくれて本当にありがとう！これは僕の宝

物だったんだ。」

ピカチュウ「・・・ねえ、お願い。一緒に探検隊になってよ！僕一人じゃ入る勇気がないよ。。。から、お願い！」

ちょっとびっくりしたようすのヒトカゲだが、もちろん、ヒトカゲはいいよと返事をした。

ヒトカゲ（でも、なんで記憶がないんだろう・・・ ）

なんて思いながらも、探検隊が結成された。

ピカチュウ「教えるの忘れたね、僕の名前は『ミケ』だよ。君は名前だけでもなんとか覚えてる？」

ヒトカゲ（う～ん・・・・・あっ！名前だけは思い出せた！）

ヒトカゲ「名前だけは、思い出せたよ、ヒカルって言うんだ。」

ミケ「へぇ～、これからもよろしく！」

そして、プクリンのギルド前。

ここは、探検隊になるための授業をする所。

ミケ「ここだよ、探検隊になるためには、ここで修行するんだよ。」

ミケは何かの穴に乗った

すると穴から・・・

『ポケモンはっけん！　ポケモンはっけん！』

『だれのあしがた？　だれのあしがた？』

『あしがたはピカチュウ！　あしがたはピカチュウ！』

と聞こえてきた。

ピカチュウはびっくりしてたが、がまんしてた。

？？？『・・・よし。　近くにもういっ匹いるな。早く穴の上に乗れ。』

と聞こえてきた。

これはきっとヒカルのことだろう。

のると同じく・・・

『ポケモンはっけん！　ポケモンはっけん！』

『だれのあしがた？　だれのあしがた？』

『あしがたは・・・えーと・・・多分ヒトカゲ！　多分ヒトカゲ！』

「多分！？」

『なんだ、その多分っていうのは！？』

とか色々聞こえてきた。

～　一分後　～

『・・・よし！たしかにヒトカゲはここらではみかけないポケモンだが、怪しくはないからいいだろう。入れ！』

の声を堺に閉まってた門がひらいた。

ミケ「あっ門が開いたよ！入ろう！」

そして入って行った・・・

つづく

～第3話～　チーム結成（後書き）

なんでこんなに長いかって？

話を合わせないと・・・

から本当はドガーズ達との戦い前で区切ってたんだがねぇ

以上！！

では明日も書きますー

明日は行けますよー

でも面倒臭いや！

熱っ！熱っ！ヒトカゲに燃やされたっ！

熱いっ！熱いっ！

ちゃんと明日も更新するからっ！

て事でいやいや明日は更新します

熱いっ！

～第４話～　ギルド入門（前書き）

申し訳ございませんっ！

一回寝たから更新が遅れました＾＾；

いそいで書いたから短いかもかもです

でわスターーーーーーート！

～第４話～　ギルド入門

あらすじ

省略！

つつつつつつつつつつ（段）しししししししししし

プクリンのギルドの門がゴゴゴと開いた。

ミケ「あっ開いた！」

ミケはびっくりしている。。。

中に入ると、下への梯子（はしご）があった。

それを降りると弟子たちでいっぱいだ。

ミケ「わぁーーっ！なんか賑やかだね！」

ミケが言った。

するとなにやらさらに下からペラップが来た。

ペラップ「なんだ、さっきのはお前たちか、私はこのギルドの者、勧誘やアンケートはお断りだよ。さあ、帰った帰った！」

ミケ「いや、違うんだ、僕達、探検隊になりたくて・・・」

ミケはそう言った。

すると、ペラップはびっくりした態度で何かぶつぶつ言いはじめた。

しかし、それは聞き取れなかっｔ・・・

作者「から火炎放射やめてくんない！？」

とりあえず飛ばして・・・（爆）

ミケ「・・・ねえ、そんなに探検隊になるには厳しいの？」

ミケは言った。

ペラップ「えっ！そんな事ないよ！仕事なんて簡単簡単♪そんなになりたいならもっと早くこればいいのに～（汗」

ペラップは焦りながらいった。とても焦っているようだ。

ミケ・ヒカル「態度・・・」

二人はすごい退いていた。

ペラップ「探検隊登録をするにはこっちだよ♪」

と言ってプクリンの部屋へつれられた。

ミケ達が創造してたより普通の部屋だった。

ペラップ「親方様。この者が探検隊になりたいと言うものです。」

（長いから省略（爆）ヒカル「もー止めとけw支持率下がるぞw」）

プクリン「じゃあ、君達チーム名決めてる？」

ミケ・ヒカル「じゃあ『ポケタンズで！あ、重なったね。」

二人は意見が合った。

プクリン「　ポケタンズか！いい名前だね！じゃあこれで登録するよ！登録登録・・・」

たあーーーーーーーーーーーーーーーーっ！

プクリンは物凄い声で叫んだ。

「ぎゃあああああああああっ！」

他の三人は悲鳴をあげてしまった。

プクリン「おめでとう！これで君はこれでギルドの仲間入りだよ！」

そう言うと、トレージャーバックと不思議な地図をもらった。

説明省略

ペラップ「さあ、明日からは仕事だからもう今日は部屋で休むといいよ。　部屋はこっちだよ♪」

そして案内されたのは・・・

部屋

部屋には人数分のベットが置いていた。

そして夜・・・

ミケ「今日は色々大変だったね・・・」

ミケが言った。

ヒカル「うん。何故こうなったのかわからないけどね・・・」

　ミケ「その内に色々思い出すって！大丈夫！」

ヒカル「そうかな・・・何があったかも覚えてないし・・・」

ミケ「色々話してたら眠くなっちゃった。そろそろ寝ようか。明日から頑張ろうね！ヒカル！じゃあお休み！」

あいからわずミケは元気だった。

ヒカル「うん！お休み～」

ミケはもう寝静まった。。。

ヒカル　（記憶はいつ、どこで消えたんだろう・・・まっとりあえずミケと一緒にいれば何か思い出すかもね・・・）

ヒカル　（・・・考え事してたら眠たくなって来た・・・そろそろ寝よう・・・）

そして、ヒカルも寝静まった。

～第４話～　ギルド入門（後書き）

できましたー

省略多いけど無視でよろしく（爆）

本当にすみませんっ

うっ眠眠・・・

早くねようと。

～第５話～　初めての依頼（前書き）

時間関係で朝から書き初めましたよー

学校行く前に！

えー、先ほど見てきましたが

ＰＶ（回覧？）が８５ですた！

意外ですねぇ～

自分のが、こんなに・・・

チーム名は元々のでやりましたが

でわ書きますスターーート！

～第5話～　初めての依頼

あらすじ

ミケ達が弟子入りしたプクリンのギルド・・・

なんとものんきなプクリンチーム登録をしてもらい・・・

探検隊になった『ポケタンズ』（爆）

（（（（（（（（（（（（（（（（（（（（（（（（（

次の日の朝・・・

『おきろおおおおおおお！あさだぞおおおおおおお！』

物凄いこえがきこえた。

これにより、ヒカルとミケは目を覚ました。

ミケ「ぎゃあああぁぁぁぁっ」

ヒカル「こ・・・鼓膜が破れる・・・」

二人はとてもうるさいと思っている。

？？？『何をしている！！早く起きんか！！』

また大きな声が聞こえて来た。

ミケ「うぎゃああぁぁ・・・」

二人は気絶寸前だ。

ドゴーム「俺はドゴーム。このギルドの弟子だ。」

ドゴーム「そんなことより早く起きろ！お前達が寝坊してあの親方のたあーーーーーーっをくらうのはごめんだからな！」

そう言うと、ドゴームは去っていった

ミケ「うー・・・まだ耳なりがなってるよ・・・」

ヒカル「えーと、なんでここにいたんだったっけ？たしかここのギルドに弟子入りして・・・」

覚えてなさそうな感じにいった。

「【注】でも、また記憶が消えたーーーーってことはないよ（爆）
ヒカルより（笑）」

ミケ「あっここに弟子入りしたんだった！て事は・・・」

ミケ「わぁ～～～！寝坊したぁ！早く行かないと！」

と早速に走って行った。

そして、地下二回の広場（？）

ついた時にはもうみんな到着していた。

ドゴーム「遅いぞ！新入り！」

ペラップ「うるさい！」

なんと短い会話的な物になった。

ペラップ「さて、みんなそろった事だし、親方様の話を聞くとしよう。」

ペラップ「親方様ー。では一言をどうぞ。」

・・・

プクリン「・・・ぐうぐう・・・ぐうぐう・・・」

ペラップ「親方様、有難いお言葉をありがとうございました♪」

ピッパ（ビッパ）　（これで、話が分かるんゲスねぇ・・・）

ナリア（キマワリ）　（これで話が分かるペラップもすごいですわ・・・）

ウィーグ（ヘイガニ）　（だよな・・・親方様って何考えてんだよ・・・）

ちょっとざわざわしている。

ペラップ「さあ！みんなでちかいのことばを言うよ！」

一同「はーーーい！」

『せぇーの！』

『ひとーつ！しごとは絶対サボらない！』

『ふたーつ！脱走したらおしおきだ！』

『みーっつ！みんなが笑顔で明るいギルド！』

ペラップ「さあ！仕事にかかるよ♪」

『おーーーーーーっ！』

ミケ「あまり分からなかった・・・」

ヒカル「初めはそんなもん・・・かな？」

と、二人は呟いた。

ペラップ「お前達。何をウロウロしてるんだ。お前達はこっちだ。」

と、案内されたのは依頼掲示板前だ。

ペラップ「お前達はこの仕事をやってもらうよ。」

（説明省略　ヒカル「やめとけよ・・・」）

ペラップ「さて、お前達にどの依頼をやってもらおうか。」

で決め初めて3分後・・・

ペラップ「おっこれなんかいいな♪では、これをやってもらおう。」

ヒカル「どれどれ？」

～内容～

こんにちは。私ハネブーともうします。
ある日悪者に私の大事な真珠が盗まれたのです！
真珠は私にとっての命。
頭の上に真珠がないと落ち着かなくてもう何もできません！
そんな時、私の真珠が見つかったかの情報が！
どうやら『しめった岩場』にすてられていたらしいんですが・・・
その岩場はとても危険な所らしく、私そんなところ行けません！
ですので、おねがい。誰か岩場に行って真珠をとって来てくれないでしょうか？
探検隊の皆さん、お願いします！

～ＥＮＤ～

なんと、落とし物を拾って来るだけの依頼でした。

ミケ「これってただ落とし物を拾って来るだけじゃないの？」

ヒカル「じゃあ、行って来ます。」

ミケ「・・・」

■←あい終わってないよ！←■

二人はしめった岩場についた。

ミケ「うわぁ・・・狭そうで危険そうだね・・・」

ヒカル「さあ、早く真珠とってこようか。」

と、内部へ・・・

ミケ「それにしても、結構長いね。」

と、呟いてる間にアノプスが出てきた。

ミケ「敵が出t・・・」

ミケ「いっ！」

ミケ「うわあああああぁぁぁぁぁ！！」

ミケは落とし穴にはまった。どうやらかなりの深さのようだ。

ヒカル「おうぃ、ミケえぇぇぇ、大丈夫？」

ミケ「いたた・・・大丈夫だけど、なんか登れそうで登れなさそうな深さだよ・・・」

と、いって壁をつたって登りはじめるミケ。

なんとか、登れたようだ。

ヒカル「じゃあ、早く行こうか！」

しめった岩場の奥地へたどり着いた。

ミケ「言ってた真珠ってあれじゃない！？」

ヒカル「多分これだよ！」

これを持って、このダンジョンを出た。

今日の分ＴＨＥ　ＥＮＤ

～第5話～　初めての依頼（後書き）

できました

はい長い！

落とし穴使った！

眠い眠い！！

はい寝る！

てきとーでごめん！

～第６話～　時空の叫び【前編】（前書き）

あいあー、

朝からの更新急ぐぞー。

昨日はギリギリｏｒｚ

あ、おまけ編できてないや・・・

よし絶対土曜日やろう（爆）

まあスタートぉ！

～第6話～　時空の叫び【前編】

【　あらすじ　】

依頼を成功したミケ達☆

おわりw

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

【ええい！迷ったけど省略！】

次の日・・・

ドゴーム『おきろおおおおおおぉぉぉぉ！朝だぞおおおおおぉぉぉぉ！』

いつもとおりうるさかった。

ミケ「昨日と同じでも慣れないよ・・・」

ヒカル　（鼓膜が・・・）

昨日と同じ状況になっている。

で、地下二階の広場？で朝会を終わらし、仕事にとりかかろうとした・・・としたその時。

ペラップ「お前たち。何そこでウロウロしてるんだ。今日はこっち

だ。」

と、連れて行かれたのは

昨日の掲示板の反対側につれてこられた。

ペラップ「お前たちは、このお尋ねものを捕まえてもらおう。」

と、張られてたのは、指名手配されてるポケモン達。

ミケ「え！？この強そうなのを捕まえろって無理だよ！」

（説明　省略）

ペラップ「じゃあ、ここから弱そうなのを選んでこらしめてやってくれ。と、その前に色々準備があるからピッバに案内してもらおう、」

ペラップ『おーーーーい！ピッバーーーー！ピッバーーーーーーーーー！』

すると、ピッバが走ってきた。

前編ＥＮＤ

～第6話～　時空の叫び【前編】（後書き）

うへぇ・・・

出来たのが送信失敗し、書き直し（爆）

えーと、次回は後編ですー

～第7話～　時空の叫び【後編】（前書き）

書き直しを繰り返してる間に

遅れました

すたーとー・・・疲れたｏｒｚ

～第7話～　時空の叫び【後編】

←続きです←

ピッバ「それじゃあ、お尋ねものを選ぶ前に、いろいろ準備してくるゲス。」

ミケ「分かった。色々準備してくるよ！」

と、トレージャータウンへ移動・・・

ミケ「とりあえず、そこのカクレオンしょうてんで冒険に必要な物を買おうか。」

～説明～

カクレオンしょうてんとは、不思議玉や、回復アイテムを売っている所。

カクレオンは兄弟で二人いる。

ヒカル　（七話目にして説明初めて・・・）

カクレオン「いらっしゃ～い！」

ミケ達は、リンゴやオレンの実やグミなど、色々買った。

カクレオン「まいどあり～！」

ミケ「さあ、準備出来たし、ピッバのの所に戻ろうか。」

ミケたちが、戻ろうとした時、マリルとルリリ達もカクレオンしょうてんにきた。

カクレオン「いらっしゃ～い！」

マリル「すいませ～ん。リンゴひとつくださーい。」

そう言い、マリルはリンゴ１つ分の※ポケを渡すと、カクレオンは、リンゴを渡した。

～ポケとは～

この世界で言うお金である。

関係ないが、１ポケ＝１００円である。

～ポケとは～

カクレオン「まいど～！」

すると、買ったリンゴをもってマリルとルリリは去った。

ミケ「あのマリルとルリリ可愛いね！いつも来てるの？」

カクレオン「そうなんですよー、最近母親が病気で寝込んでるので、代わりに買い物してるらしいんですー。」

ヒカル「へえーっそうなんだ。」
すると、向こうの方からマリルとルリリが帰ってきた。
マリル「すいませーーーーーん！」
と、走って来ると、
ルリリ「リンゴひとつ多いです！」
マリル「僕達、こんなに多く買ってないです！」
と言って、リンゴをひとつ差し出した。
カクレオン「これは、私達からのおまけだよ。二人でなかよく食べなさい。」
マリル「本当に！？」
ルリリ「わーい！ありがとう！」
また、マリル達が帰ろうとすると・・・
ルリリ「いたっ！」
つまずいてしまった。おまけに、リンゴも落とした。
そのリンゴを、ヒカルは拾って、ルリリにわたした。
ルリリ「ありがとうございますっ！」

と、お辞儀をすると、歩いて行った。

すると・・・

ヒカル「うっ！」

ヒカルは、その場に倒れこんだ。

ヒカル「これは・・・なんだ・・・」

しかし。この事に誰も気づいてなかった。

ヒカルの脳内には、

『た・・・たすけて！！』

と聞こえた。

ヒカル「なんだったんだ・・・」

すると、ミケが来た。

ミケ「何しているの？早く行こうよ！ピッバが待ってるよ。」

と、先を急いだ。

すると、またまたマリル達がいた。

さらに、スリープもいた。

マリル「あ！さっきの！」

ミケ「どうしたの？こんなところで。」

ルリリ「私達の落とした物を探してたら、スリープさんが、見たことがあるって！」

スリープ「いやいや、君達みたいな幼い子を見てほっとける訳がないですよ。はやくいきましょう！」

マリル「ありがとうございます！」

去って行こうとすると、スリープとヒカルがぶつかった。

スリープ「おっと。これは失礼。」

と去って行った。

するとまたヒカルにさっきのが遅いかかる。

ヒカル「ぐっ！」

ヒカル「まただ・・・さっきの・・・」

すると、ヒカルの脳内に、何かが見えた。

スリープ「言う事を聞かないと痛い目にあわせるぞ！！」

ルリリ「た・・・たすけて！」

で、終わった。

ヒカル　（なんなんだ・・・）

ミケ「最近悪いポケモンがいる中であういう事をできるよねー、偉いなぁ・・・」

ヒカル「・・・ちょっといい？」

と、さっきの事を話した。

ミケ『　えぇー！？スリープは悪いポケモンだって！？』

ミケ「それも信じたいけど・・・あんだけ親切なんだよ？とにかくピッバがまってるよ！はやく行こう！」

∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀∀

～第7話～　時空の叫び【後編】（後書き）

あー、やっとだー・∀・まったりゆったり☆

時間かかった・・・

～第8話～　ルリリとお尋ねもの（前書き）

更新遅れてすいません！

いそげーーー！

スタート！

～第8話～　ルリリとお尋ねもの

そして、ピッバの所へ戻ったミケとヒカル。

ピッバ「準備できたゲスね！じゃあ、この中からお尋ねものを選ぶゲス！」

ミケ「えーと・・・どれにしよーかな・・・」

迷ってる間に内容が更新された。

【早送り　⇒⇒⇒更・・・うわ・・・で・・・って・・・⇒⇒⇒】

ミケ「よぉ～し、さあまた選ぼうか。」

ミケ「・・・・・・・・・・・・・。」

何故か震えだした。

ミケ「ねぇ・・・一番右上を見てよ・・・」

その方向には、早急のスリープの絵があった。

ヒカル「これは・・・！」

ミケ「さっきのスリープはお尋ねものだったんだ！だとすると・・・マリル達が危ないっ！」

と、さっそうと走って行った。

トレージャータウンの出口周辺（？）

そこにはマリルがいた。

マリル「あっ！ピカチュウさん！」

ミケ「えーと、ルリリは！？」

マリル「それがスリープさんとトゲトゲ山を登り初めたんですけど・・・」

ミケ「その、トゲトゲ山に案内してよ！」

すると、マリルはトゲトゲ山の入り口へ案内した。

マリル「ここです！」

ここは、ヒカルが目眩で見えたのと『ほぼ』同じだ。

ミケ「よし、早く追いかけよう！」

その山中には、沢山ポケモンがいた。

ミケ「えいっ！たいあたり！」

ヒカル「ひのこ！」

どんどん敵ポケモンを倒していった。

【早送り　で・・・ひのこ・・・やった・・・うわっ・・・】

そして、頂上。

つづく

～第８話～　ルリリとお尋ねもの（後書き）

次回はスリープＶＳポケタンズです

作者は夜中塾筆中に寝てしまったよーですから遅れましたー

なーんか、後の方がもう話の内容決まってるんですねー、

更新頑張りますー

ではまたまたノシ

～第9話～　ルリリを救え！（前書き）

書き直し激しかった・・・

更新でーす

ここ長めに書きたいなーってw

←でも書く事がないからどうぞー♪←

～第9話～　ルリリを救え！

一方スリープとルリリは、トゲトゲ山の頂上へ・・・・

ルリリ「あれ？お兄ちゃんは？」

スリープ「マリルは・・・つれてこないのさ・・・（苦笑）」

ルリリ「おまけに、探し物は？」

スリープ「それは、ここの穴の中さ。（苦ｒｙ）」

ルリリ「この穴の中に・・・」

スリープ「そう。この中にあったんだ。しかし、自分は入れない。から行って来なさい。」

実は、これは、真っ赤な嘘であった。

この穴の中にルリリを閉じ込めようとしていたのであった。

ルリリ「えっ・・・誰かっ！」

スリープ「ちょっとせっかくここまで連れてきたのになんだ！言うことを聞かないと痛い目にあわせるぞ！」

ルリリ「たっ・・・たすけて！」

と、そこへちょうどミケ達がきた。

ミケ「あっ！あれは！！」

とても、ミケは驚いているようだ。

ミケ「やめろ！！ルリリをはなせ！」

強気。

スリープ「なっ！！あのマリルが読んだのか！！」

と、驚いてる。

ミケ「・・・うぅっ・・・」

ミケは震え出した。

スリープ「・・・おっ？震えてるって事はまだまだ新入りなんだな。たしかにそうだ。俺はお尋ねもの、スリープだ。俺を捕まえれるもんなら捕まえてみな！」

ミケ　（怖いよ・・・）

と、いつの間にか戦闘開始していた。

ヒカル「このっ！火の粉！」

早速攻撃した火の粉は、スリープに見事命中。

やや効いてるようだ。

ヒカルのたて続きに、
ミケ「このっ！体当たり！」
体当たりをくりだした。
火の粉とほぼ同じタイミングだったため、当たった。
もう、スリーブは大分ダメージをくらってるようだ。
スリープ「なっ！・・・だが、俺を甘く見るなよ！」
と、何やらミケに向かって念力を送りだした。
ミケ「あれ・・・動けない・・・」
すると、ひとりでに壁側に飛ばされてしまった。
『うわっ！』
ルリリ「あっ！ピカチュウさんっ！」
ミケ「うっ・・・大丈夫・・・かも」
ミケは凄いダメージをくらった。
だが、その好きをついて、ヒカルが火の粉をうちはなった。
すると、また念力だ。

が、近くの石を浮かせ、ヒカルの方向に飛ばした。

ヒカル「うわっ！」

ぎりぎりかわした。と思ってたらすぐに別の石が当たった。

ミケ「このぉっ！＊でんこうせっか！」

＊漢字間違えてたらあれなのでひらがなです

スリープ「ぐわぁぁぁっ！」

すると、スリープか気絶した。

ミケ「やったあ！お尋ねものを倒したぞ！」

ミケとヒカルは喜んだ。

そして、スリープをつれてトゲトゲ山を下った。。。

～第9話～　ルリリを救え！（後書き）

出来た（∵　；　）

あー疲れたw

ヒカルって出番少ないと思って来たなぁ・・・

ようし、おまけ編で沢山・・・

では！

～第１０話～　事件（前書き）

ふぃー。

更新。

前回のが入ってます。

ではー。

～第１０話～　事件

続きから。

ペラップ「お前達。ご苦労だったな。これは報酬だ。」

と、渡したのは、２５０ポケだった。

ヒカル・ミケ「え～～～！！そりゃないよぉ～～～っ」

ペラップ「これがこのギルドの規則なんだ。がまんしな。」

と、言葉を残しペラップは去った。

ミケ「うぅ・・・」

ヒカル　（詐欺だ・・・（苦笑）

そして、一夜が明けた・・・

その時、事件は起こった。

『起きろおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉ！朝だぞおおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉ！』

ヒカル「ひえぇ・・・パタン」

ミケ「耳が・・・」

【朝礼】

ペラップ「えー、ここで事件が起こった。それは・・・」

ペラップ「時の歯車が盗まれたのだ。」

一同『えぇーーーっ！？』

ビッパ「時の歯車って何ゲスかー？」（棒読み）

ナリア「時の歯車が盗まれただなんて・・・」

ポンタ「ヘイヘイ！そんな物盗んでどうすんだい！」

と、みんなは言った。

ミケ　（時の歯車って・・・）

～第１０話～　事件（後書き）

ちょっと短い！

ちょっと短い！

ちょっと短い！

はぁ・・・

では。

～第１１話～　滝壷の洞窟で探検（前書き）

作者並には長く書けたのです

からもう作者は寝るのです

からどうぞ

～第１１話～　滝壷の洞窟で探検

短い短い昨日の続き

ペラップ「だから、不振な物を見つけたら報告してくれ。」

と、朝礼が終わり・・・

ペラップ「お前達。今日は探検隊らしい仕事をしてもらうぞ。」

ミケ「えぇっ！！本格的な仕事！？」

ベラップ「それじゃあ、説明をするから不思議な地図を出してくれ。」

すると、二人は地図を出した。

ペラップ「そこに（と言われても画像ないからわからないけど・・・）滝があるだろ。そこが怪しいと思われてるんだ。そこで、お前たちはそこの滝を調査することだ。わかったな。」

ミケ「は・・・はい！」

と、言い、謎の滝へ・・・

滝は、ものすごい水しぶきをたてている。

音もすごい、

ミケ「うわぁ・・・こんな大きな滝があったんだ・・・」

ヒカル「なんか・・・何も無さそうな・・・」

ミケ「この滝の勢いってどれぐらいなんだろぅ・・・」

『うわっ！』

ミケ「ふぅ、この水の勢いすごいや・・・ヒカルも触ってごらんよ。」

と、ヒカルも手を出す。

『ぎゃっ！』

同じ結果だ。

ヒカル「しかし、勢いがすごいね・・・」

その時。

ヒカル「うっ！これ・・・は・・・」

ミケ「しかし、この滝何もなさそうだね～・・・」

ヒカル「前・・・のだ・・・」

すると、シルエットだが、誰かのポケモンが滝に向かって飛び込ん

で洞窟の中に入ると言う光景が見えた。
そこで映像は途切れる。
ヒカル「・・・なんだったんだ・・・」
今の事をミケに話した。
ミケ「えぇ～！？この滝の裏は洞窟だってぇ～！？」
ミケ「う～ん・・・この滝の裏に洞窟があるなんて考えられないよ・・・それに、なにもなかったら僕たちどうなるか・・・」
ミケ「わかった。ヒカルを信じるよ。この裏に洞窟があるんだね。それじゃあ行くよ。」
『1・2の・・・3！！』
バシャァァァァン！
ミケ「・・・ここは？洞窟って事は・・・」
ミケ「やっぱり滝のうらには何かあったんだ！早く奥へ行こう！」
と、言い、滝壺の洞窟・・・
ヒカル「・・・うぅ・・・」
ミケ「ん？どうしたの？ヒカル。」

ヒカル「いや、水タイプのポケモン苦手だし出て来たらどーしよーなんて・・・」

ミケ　（ま・・・まぁ・・・炎タイプだし・・・）

と、言ってる間に水ポケモンは出て来たが・・・

ミケ「１０万ボルト！」

と、水タイプのポケモンをほぼ倒した。

ミケのタイプと水のタイプたどミケの方が相性がいいのだ。

なんだかんだで、奥地・・・

ヒカル「うわぁぁ・・・宝石がいっぱい・・・」

奥地は、宝石など宝物が沢山置いていたのだ。

ミケ「あれ一番大きいよ！あの一番大きいの抜けるかなぁ・・・」

と、引っ張り始めた。

しかし、抜けない。

ミケ「抜けないや・・・ヒカルも引っ張ってみなよ。」

と、次はヒカルが引っ張り始めた。

しかし、抜けな（ｒｙ

ヒカル「はぁはぁ・・・ぬけないや・・・」

と、またその時！

ヒカル「ぐっ・・・まただ・・・」

ヒカル「こんどは・・・なんだ・・・」

と、今度はシルエット型のポケモンが一番大きい宝石についてるスイッチをおすと水流に流されたと言う光景だった。

そこで途切れた。

ヒカル「流されてた・・・って事は！？」

ミケ「ん？何このスイッチは。」

と、スイッチを押した。

ヒカル「あー！！そのスイッチは押しちゃだめ・・・あっ・・・」

ゴ　ゴ　ゴ　・　・

ゴ　ゴ　ゴ　・

すると向こう岸から水流がながれてきた。

ミケ「え・・・何！？水が・・・」

ヒカル「うわあああああぁぁぁぁぁぁぁつ！」

と、流されてしまった。

ミケ「ひゃあああああああぁぁぁぁぁぁ・・・」

流された先は・・・

温泉だった。

ボチャン！！

ポッチャマ「あらら・・・大丈夫？」

ナエトル　（びっくりした・・・）

ミケ「うーん・・・あれ？温泉だ！！」

ヒコザル「えー、空から降って」

ヒカル　（ヒコザルが良く温泉に使ってられるな・・・）

コータス「お主達。何処からきたんじゃ？ほれ、不思議な地図を出してごらんなさい。」

ミケ「よく地図濡れなかった・・・」

コータス「まあ、不思議な地図は絶対濡れないし破けないから長持ちするんじゃ。」

コータス「この滝の所から流れて来たのか？」

ヒカル「そう、そして、水流に流されてここまで・・・」

コータス「なんと！！そんな所から・・・よほど疲れてるじゃろう。ゆっくり休みなさい。」

と、温泉で休んで帰った・・・

～第１１話～　滝壷の洞窟で探検（後書き）

はい終わった。

ヒカル「怪我した・・・」

知らんよ。

ミケ「ひどい・・・」

では。

第１２話について（前書き）

早速ですが…

『長期的更新停止申し訳ありませをでしたっ！』

心からお詫び申し上げます

第１２話について

【次回更新時はここがストーリーになります】

こんにちはー

更新がとっても停止していました…

毎日内容に困り果て進みませんでした

色々とすみません…

今後の更新予定は未定（年内の内）ですが、

待って頂けると嬉しいです。

かなり、短くなりましたが、この辺で。

何故か、活動報告を使わなかったかって言うと、

プロフィールを見てないかもしれないからです

＃　＃　＃　＃　＃　＃

結局、１１月は更新無しでした…

なのに、１１月のアクセス解禁がＰＶ３８も行ってました…

見てくれた人、ありがとうございます！

これからもよろしくです

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6635x/

ポケモン不思議のダンジョン 緑の探検隊

2011年12月17日09時45分発行